

腎盂尿管腫瘍を原発とした転移性副腎腫瘍の1例

大阪大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 園田孝夫教授)

岩佐 厚, 小林 義幸, 吉岡 俊昭

中 村 正 広, 松 田 稔

岩佐診療所

岩 佐 賢 二

METASTASIS OF CANCER OF THE RENAL PELVIS
AND URETER TO THE ADRENAL GLANDAtsushi IWASA, Yoshiyuki KOBAYASHI, Toshiaki YOSHIOKA,
Masahiro NAKAMURA and Minoru MATSUDA

From the Department of Urology, Osaka University Hospital

Kenji IWASA

From Iwasa Clinic

A 67-year-old man was found to have a metastatic tumor of left adrenal gland originating from the left renal pelvic and ureteral cancer. Histopathological findings of the renal pelvic and ureteral cancer indicated transitional cell carcinoma, which was the diagnosis for the adrenal tumor. Diagnosis of cancer of the renal pelvis and ureter with metastasis to the adrenal gland before operation is very rare. A review of the literature on the metastasis from cancer of renal pelvis and ureter was made.

(Acta Urol. Jpn. 35: 1573-1576, 1989)

Key words: Metastatic adrenal tumor, Renal pelvic and ureteral tumor

緒 言

転移性副腎腫瘍は臨床症状に乏しく、臨床例で診断、治療されることはきわめて稀である。今回、われわれは腎盂尿管腫瘍を原発とする転移性副腎腫瘍を臨床例で経験したので報告すると共に若干の文献の考察を加えた。

症 例

患者: 67歳, 男性

主訴 肉眼的血尿

家族歴: 既往歴: 特記事項なし

現病歴: 1986年8月頃より、左腰背部鈍痛を伴った肉眼的血尿が出現したが、放置していた。肉眼的血尿は、その後も間歇的に出現した。1987年7月20日、岩佐診療所を受診し排泄性腎盂造影にて左無機能腎を指摘され、さらに膀胱鏡にて左尿管口からの出血所見により左尿管腫瘍を疑われ、当科へ紹介となった。

入院時現症: 左腰背部に圧痛を認める以外には、特記すべき所見を認めなかった。

入院時検査成績: 一般検査; RBC $454 \times 10^4/\text{mm}^3$, Hb 14.1 g/dl, Ht 41.9%, WBC $8,400/\text{mm}^3$ (St 0%, Seg 48%, E 3%, L 36%, M 9%), 血小板 $21.4 \times 10^4/\text{mm}^3$. 血液化学; 電解質に異常を認めず。腎機能に異常を認めず。LDH が 953 IU/L 以外には異常を認めず。血沈; 25 mm/hr, 60 mm/hr. 尿沈渣; 赤血球, 多数。白血球, 多数。上皮 (-), 円柱 (-), 細菌 (-)。細胞診; class V, 移行上皮癌。

X線学的所見: 胸部写真に異常所見なし。排泄性腎盂造影では、左腎が描出されず無機能腎と考えられた。また同部位に石灰化像の所見は見られなかった。逆行性腎盂造影では、尿管カテーテルは左尿管口より約 3 cm しか挿入できず上部尿路の造影はできなかった (Fig. 1)。なお、膀胱内に明らかな腫瘍を認めなかったが、左尿管口よりの凝血塊を認めた。腹部 CT 造影像では左腎盂尿管は著明に拡張し、また尿管壁の

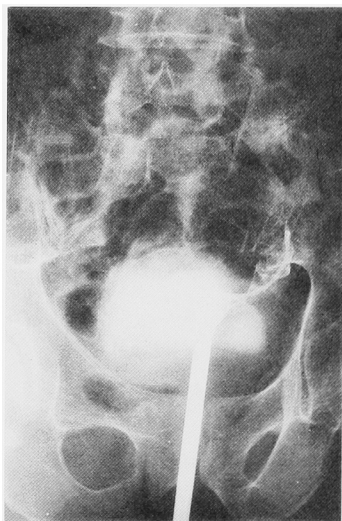


Fig. 1. Retrograde pyelography shows left ureteral obstruction.

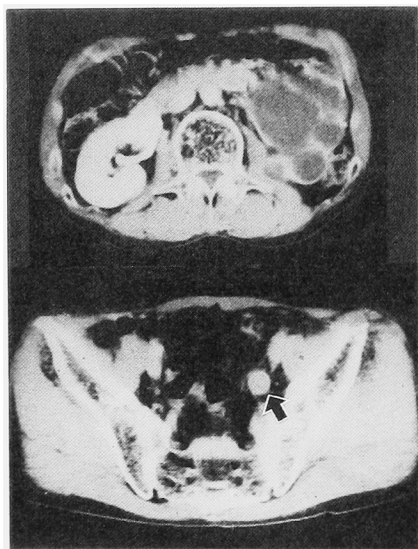


Fig. 2. Enhanced CT shows hydronephrosis and ureteral tumor (arrow) in the left kidney and ureter.

肥厚を認めた (Fig. 2). さらに、左副腎に造影されない腫瘍を認めた。副腎腫瘍は腎部との境界は明瞭であった (Fig. 3)。なお、他臓器に転移を思わせる所見は認められなかった。

以上により、左腎盂尿管腫瘍との診断をえたが、X線学的所見からでは副腎腫瘍に関して、腎盂尿管腫瘍の副腎転移、直接浸潤、または副腎原発腫瘍との鑑別ができなかったため内分泌学的精査を行った。

内分泌学的所見；カテコールアミン (分画)、コルチ

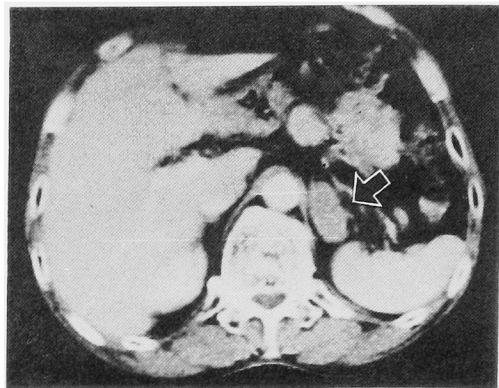


Fig. 3. Enhanced CT shows non enhanced tumor in the left adrenal.

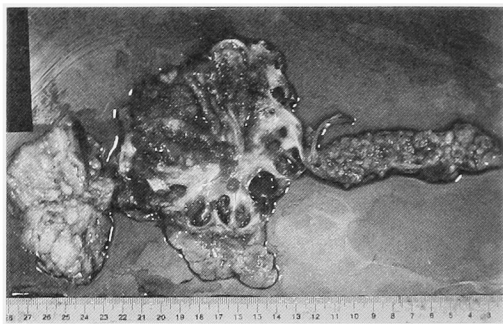


Fig. 4. Gross appearance of the hydronephrotic kidney, ureteral tumor and adrenal tumor.

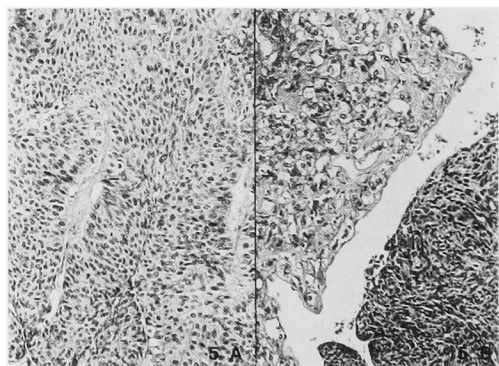


Fig. 5A. Histopathological findings of the renal pelvic and ureteral cancers reveal transitional cell carcinoma.

5B. Histopathological findings of the adrenal tumor also show transitional cell carcinoma.

ゾール、アルドステロンはすべて正常範囲であった。

副腎腫瘍に関して腎盂尿管腫瘍の副腎転移、浸潤もしくは、内分泌非活性副腎腫瘍が考えられたため、同

年8月14日に左腎尿管全摘除術, 左副腎摘除術を施行した。

手術所見: 左腎は腎門部, 腎盂が周囲と癒着しさらに腸腰筋とも癒着していた。副腎と腎臓との境界は明瞭であり連続性はなかった。剖面では乳頭状の腫瘍が腎盂尿管を充満しており腎盂は嚢胞状を呈していた (Fig. 4)。

組織学的所見・腎盂腫瘍は transitional cell carcinoma G1>G2 であり (Fig. 5A) 副腎腫瘍も同様の組織学的所見であり特に血管内に著明に見られた (Fig. 5B)。腎と副腎との境界部は炎症所見のみで浸潤を思わせる所見はなかった。以上により, 左腎盂尿管腫瘍, 同側副腎転移との診断をえた。

術後経過: 経過良好であり術後20日にて退院となった。以後外来にて経過観察中であるが膀胱再発, 遠隔転移の徴候は認められていない。

考 察

内分泌活性副腎腫瘍は, しばしばその特徴的な症状から発見, 診断されることが多いが, 続発性副腎腫瘍は術前に発見されることはきわめて少ない。前立腺癌の副腎摘除術の際に偶然発見された症例¹⁾をのぞくと術前に診断された症例は腎癌²⁻³⁾, 肺癌⁴⁾, 肺癌を原発巣と考えられた症例⁵⁾に見られるのみである。しかし, 剖検例によると, 転移性副腎腫瘍は比較的高頻度に認められており, Willis⁶⁾によれば500例中45例(9.0%), Glomset⁷⁾によれば821例中110例(13%)に認められたと報告している。

今回われわれは, 1981年(第24誌)から1985年(第28誌)までの5年間の日本病理剖検輯報⁸⁾により

転移性副腎腫瘍の考察を加えた。転移性副腎腫瘍は20,602例に認められ, これは全悪性腫瘍剖検例数120,627例の17.1%に相当した。原発部位からみると胃癌が最も多く肝癌, 肝内胆癌がこれにつづく。腎盂腫瘍は102例で転移性副腎腫瘍剖検数の0.5%を占めている (Table 1)。

つぎに腎盂尿管腫瘍の転移を剖検例でみると副腎への転移は2,019例中102例5.1%を占め5番目に頻度が高い (Table 2)。これは, 腎盂尿管腫瘍の副腎転移が決して稀でないことを示しているが, このような剖検での発見率にもかかわらず, 腎盂尿管腫瘍の副腎転移が臨床例で診断された例は Batata⁹⁾によれば1例, 今野ら¹⁰⁾によれば5例が報告されているだけにすぎない。本症例は腎盂尿管に生じた移行上皮癌の同側副腎転移が術前に発見, 治療された稀な症例である。転移性副腎腫瘍の臨床例が少ない理由として, 術前にはアジソン氏病などの内分泌異常による臨床症状を示すことがきわめて稀であり, また超音波や CT などの画像診断法を用いなければ発見される機会が少ないためと考えられる。小野寺¹¹⁾らは185例の膀胱癌症例のうち剖検をおこなった症例中2例に副腎転移が証明され, うち1例にアジソン氏病が認められたとしいるが, 癌転移によるアジソン氏病の併発は本邦においては22例しか報告されていないとしている。近年の画像診断の進歩, 普及により今後, 転移性副腎腫瘍の臨床例がより高率に発見されると考えられる。

結 語

61歳, 男性に発生した左腎盂尿管腫瘍, 同側副腎転移の1例を報告した。

Table 1. Primary lesions of the metastatic adrenal tumor

順位	臓器名	計	%	順位	臓器名	計	%
1	肺・気管支	5,759	28.0	14	皮膚	126	0.6
2	胃	3,361	16.3	15	甲状腺	125	0.6
3	肝・肝内胆管	1,809	8.9	16	腎盂	102	0.5
4	膵	1,578	7.7	17	軟部組織	87	0.4
5	結腸・盲腸	1,068	5.2	18	副腎	83	0.4
6	胆嚢・肝外胆管	777	3.8	19	上気道	83	0.4
7	乳房	708	3.4	20	十二指腸・小腸	78	0.4
8	腎	539	2.6	21	後腹膜	73	0.3
9	食道	486	2.3	22	胸腺・縦隔	71	0.3
10	子宮	356	1.7	23	睾丸	67	0.2
11	膀胱	247	1.2	24	舌	52	0.1
12	前立腺	241	1.1		その他	2,518	12.1
13	卵巣	208	1.0		不明	102	0.5
				合 計		20,602	100.0

Table 2. Metastatic organs from the malignant renal pelvic and ureteral tumor

順位	臓器名	計	%	順位	臓器名	計	%
1	リンパ節	620	30.7	11	膀胱	37	1.8
	(近位リンパ節)	(229)	11.3	12	胸膜	36	1.8
	(遠位リンパ節)	(391)	19.4	13	脾臓	32	1.6
2	肺	239	11.8	13	心臓・大血管	32	1.6
3	肝・肝内胆管	208	10.3	15	横隔膜	26	1.3
4	骨	138	6.8	16	大腸	18	0.9
5	副腎	102	5.1	17	小腸・十二指腸	14	0.7
6	腎	74	3.7	18	軟部組織	13	0.6
7	後腹膜・尾仙骨	61	3.0	19	胃	12	0.6
8	腹膜・腸間膜	57	2.8	20	脳	11	0.5
9	膵	43	2.1	20	卵巣	11	0.5
10	その他の泌尿器	39	1.9		その他	196	9.9
				合 計			
				2019 100.0			

稿を終えるにあたり、御校閲を賜りました園田孝夫教授に
 深謝致します。尚、本論文の要旨は第121回日本泌尿器科学
 会関西地方会にて発表した。

文 献

- 1) 林田健一郎, 河田栄人, 江藤耕作: 前立腺癌の副腎転移. 泌尿紀要 **19**: 92-96, 1973
- 2) 小出敏夫, 木根渕清志: 腎癌の副腎転移. 順天堂医学 **23**: 92-96, 1977
- 3) 峰山浩志, 小松原秀一, 阿部礼男: 両側副腎転移を示した腎細胞癌の1手術例. 西日泌尿 **43**: 997-1001, 1981
- 4) 北村慎治, 藤永卓治, 三軒久義: 続発性副腎腫瘍の1例. 日泌尿会誌 **73**: 401, 1982
- 5) 大島憲二, 田中精二, 青木史一: 転移性副腎腫瘍の1例. 西日泌尿 **46**: 1002, 1984
- 6) Willis RA: Pathology of Tumors. 3rd edi-

tion, Butterworth, London, 1960

- 7) Glomset DA: The incidence of metastasis of malignant tumors to the adrenals. Am J Cancer **32**: 57-61, 1938
- 8) 日本病理学会編: 日本病理剖検輯報, 第24輯〜第28輯, 杏林書院, 東京, 1981〜1985.
- 9) Batata MA, Whitmore WF, Hilaris BS, Tokita N and Grabstald H: Primary carcinoma of the ureter: a prognostic study. Cancer **35**: 1626-1632, 1975
- 10) 今野 繁, 田中淳一郎, 江藤耕作: 腎盂扁平上皮癌の1症例と本邦症例の統計的考察. 泌尿紀要 **24**: 683-691, 1978
- 11) 小野寺豊, 鈴木駿一, 杉田篤生, 三浦忠雄, 加藤正和, 加藤輝彦, 矢吹日出雄: 膀胱癌副腎転移症例. 日泌尿会誌 **57**: 221, 1966

(1988年12月14日受付)